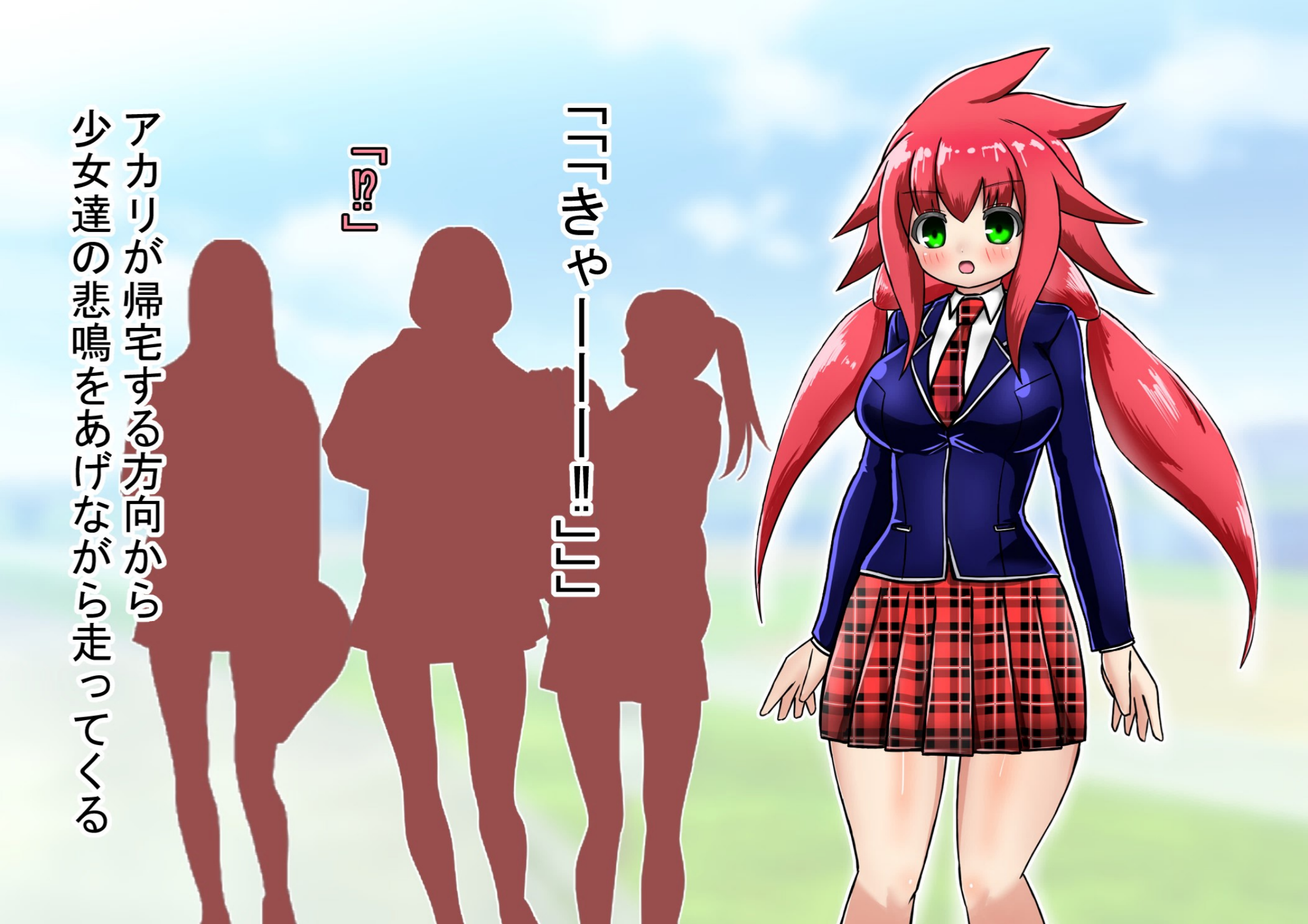
ラスティレッド
敗北洗脳

彼女の名は「紅(クレナイ)アカリ」

輝楽ケ丘学園(きらがおかがくえん)に通う少女

少し恥ずかしがり屋で
まだまだ子供っぽさは目立つが
困ってる人を放っとけない心優しい女の子

普通の少女として
過ごしてきたアカリ
そんな彼女が過ごして来た平和な町
輝楽ヶ丘、そしてアカリ自身に
悪の魔の手が迫ろうとしていた。


アカリが帰宅する方向から
少女達の悲鳴をあげながら走ってくる
『!?』
『『『きゃーーーー!!』』』

少女達が逃げてきて先には人が何人か倒れており
黒い衣装の戦闘員
そしてそれらを従える
モンスターが下校中の学生たちを襲っている。
『な、なに!?』
「ぬへへ～
おいらはバッドクロスのライミー!!!」

『ひゃっ!?』
「次は君からエネルギーをもらっちゃおう!」
とつぜん輝楽ヶ丘に現れた
悪の組織"バッドクロス"
彼らの魔の手がアカリに迫ったその時…!!

パアアア…
「うほっ!!なんだ!?」
突如とアカリの体が光り輝き
ライミーを弾き飛ばした!!
そして…

【第3章　ナノマシンの罠】

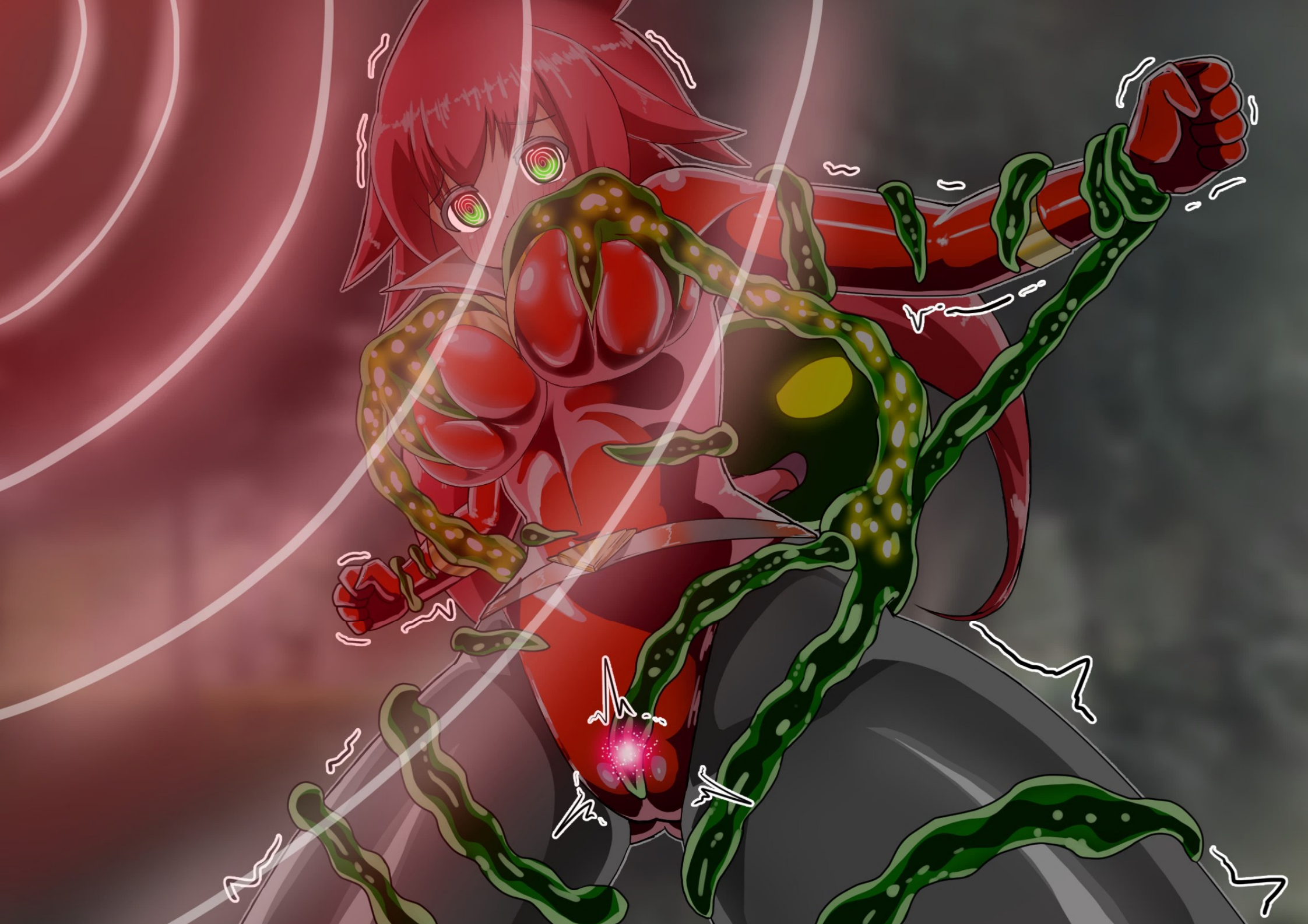
『ふむ、そろそろ頃合いだな
"あれ"を使え』

ビームを受け続けるアカリに
小さな針のついた小型ロボがアカリの乳首と股間に目掛け
飛んでいき針を突き刺す

（うっ、変なところにも攻撃当てられてる…！）
乳首や股間への刺激は感じたものの
小型ロボに刺された事自体は気づいていない。

「後退するぞ！」
戦闘員達が撤退していく。
「ま、待って…うう…！」
ぶるる…！
ほぼ無傷とはいえ攻撃を受け続けた刺激で
アカリはからだを身震いさせている。
「はぁはぁ…くっ！」
（体中ジンジンする…）
はっ
はっ

一時撤退した戦闘員を見て一息つくアカリ
「ふぅ、ちょっと休憩。あの子大丈夫かな？
…んっ、攻撃を受けすぎたかな…からだが
むずむずする…」
（特に乳首と股がむずむずしてからだが熱い…）
ふぅ
ふぅ
ピク！
ピク！
ピクン！
（なんだかオナニーしたいとき、みたい……）
「はっ！こ、こんな時に何を考えてるんだぼくは…！
そうだ戦闘員達を追いかけなきゃ！」



【第６章　洗脳動画サイト】

「はぅ！んぅ…♥」
ピピピ…！
自室に着いて休む暇もなく
ナノマシンに身体を発情させられ、さらに催眠状態へと
導かれたアカリは何かに誘われるようにパソコンをつける。
カチ
カチ
催眠は薄れ自我を取り戻すが、身体の疼きを鎮めるため
ネットを開き淫らな内容のものを探し出す。

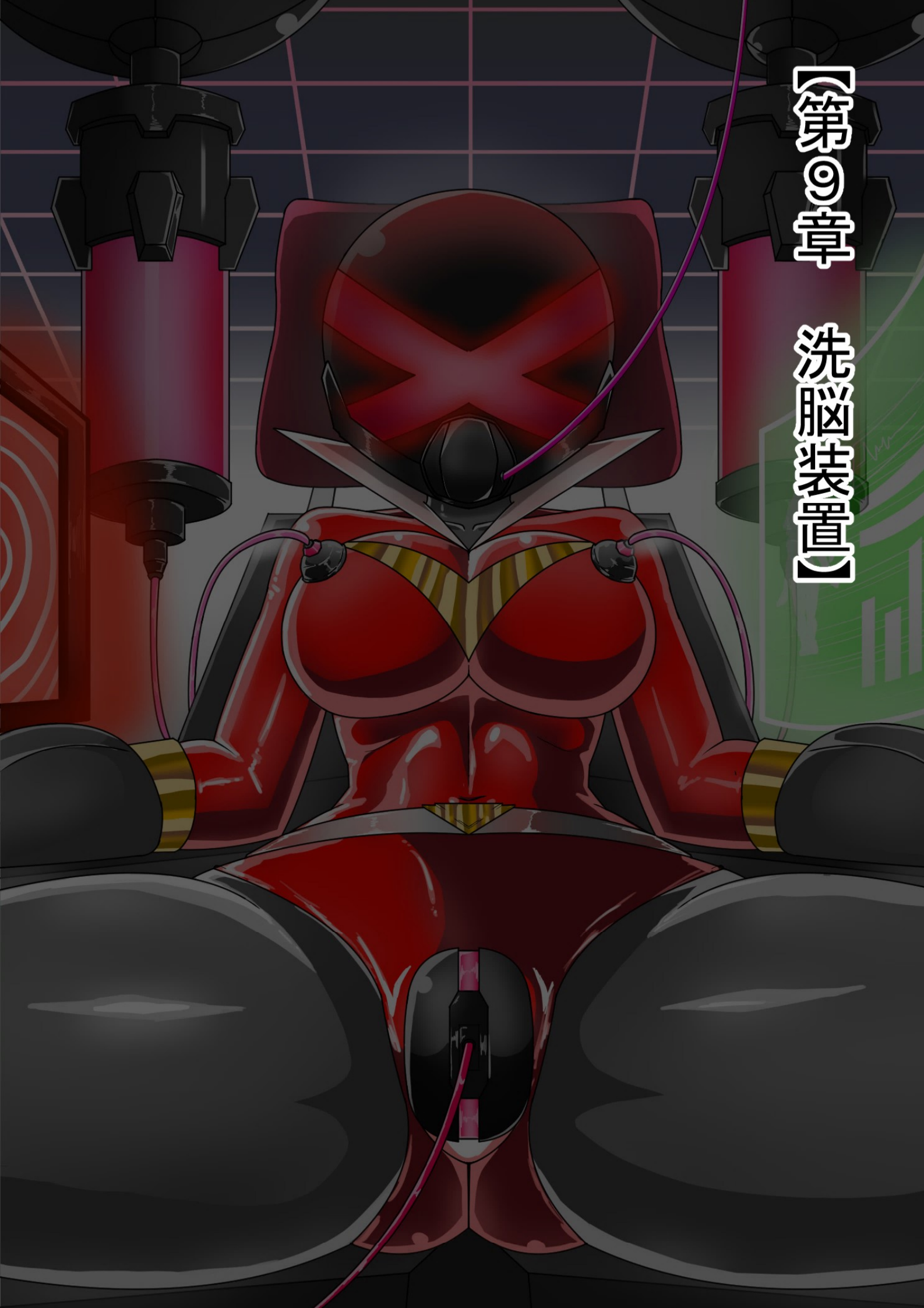
キィィィィン
すると赤いバナーに目が留まる。バナーは赤い背景に渦を巻くような映像が流れるようなものでどこか催眠映像を思わせるものだ。
「これ…押さない方が…でも……♥」
キィィィィ…
一瞬躊躇するが意識が希薄になり、期待感を膨らせながら、そのまま誘われるようにバナーをクリックしてしまう。
ピピピ…
「変身ヒロイン…敗北凌辱…？」
バナーをクリックした先には動画がアップされている。
「この子の衣装、なんかぼくのに似てる…」
その動画のサムネイルにはバッドクロスを思わせる悪役やラスティレッドのような衣装に身を包んだ少女が写ってる。
「……んっ」
意識が希薄な状態のアカリは期待を膨らませそのまま動画の再生ボタンを押した。
カチ
カチ

【第7章　弱体化装置の脅威】

『……』
『……？』
自身の部屋に着きしばらく放心状態だったが
手に何かを握りしめていることに気が付くアカリ。
『…これは…』
アカリが握りめていたのはバッドクロスが使った
弱体装置だった。

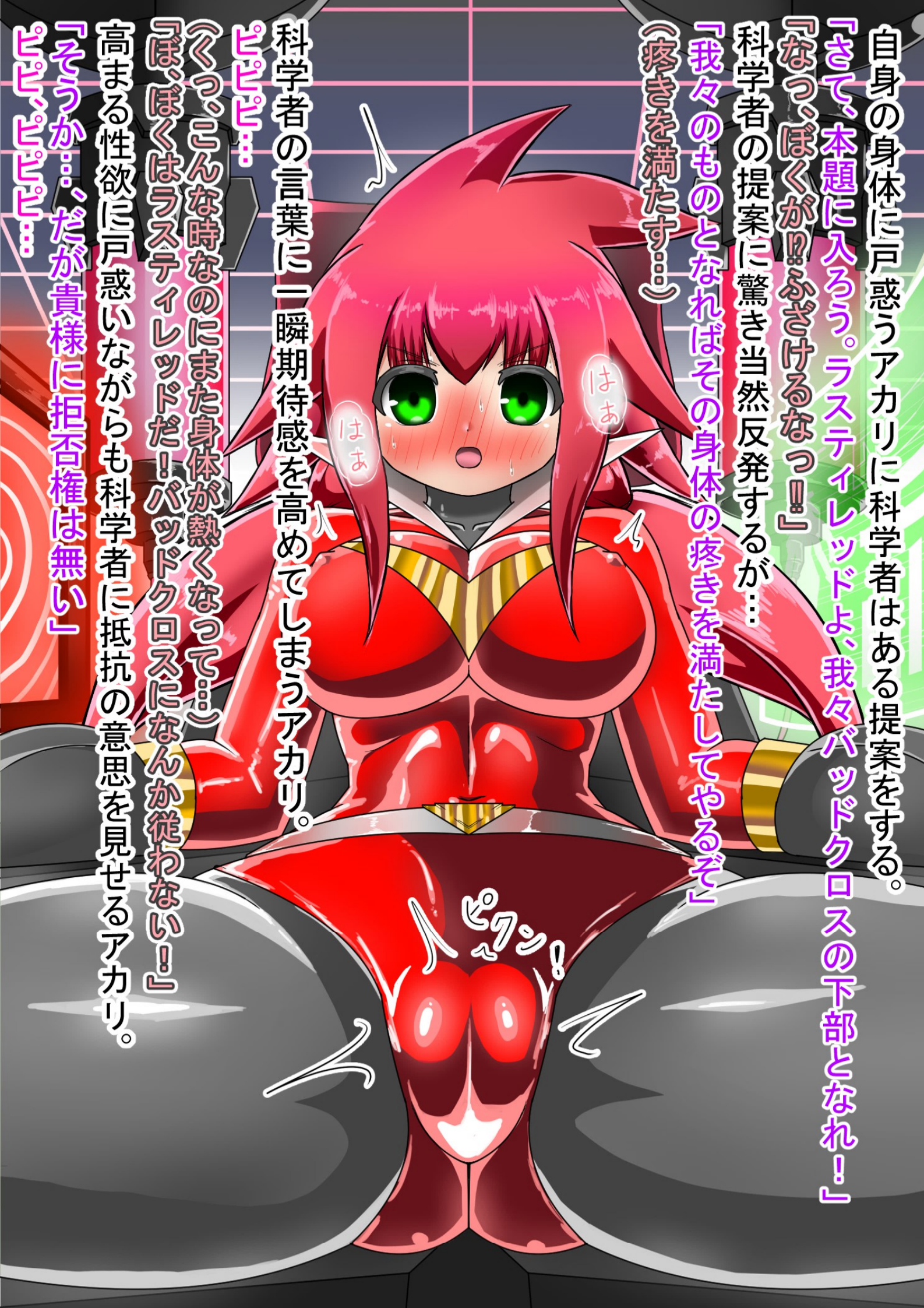
『んっ…♥』
装置を見て射精されたことを思い出すアカリ。
犯された時のことを思い出し身体が火照り始める。
するとアカリの脳裏にある考えが過る。
『これ……使ったら…♥、でも…ダメ…!』
キィィィ……
一瞬だけ我に帰り脳裏に過った
考えを振り払おうとするがナノ
マシンが催眠状態へと誘導する。
『少しだけ…』
『…ラスティ…チェンジ…♥』

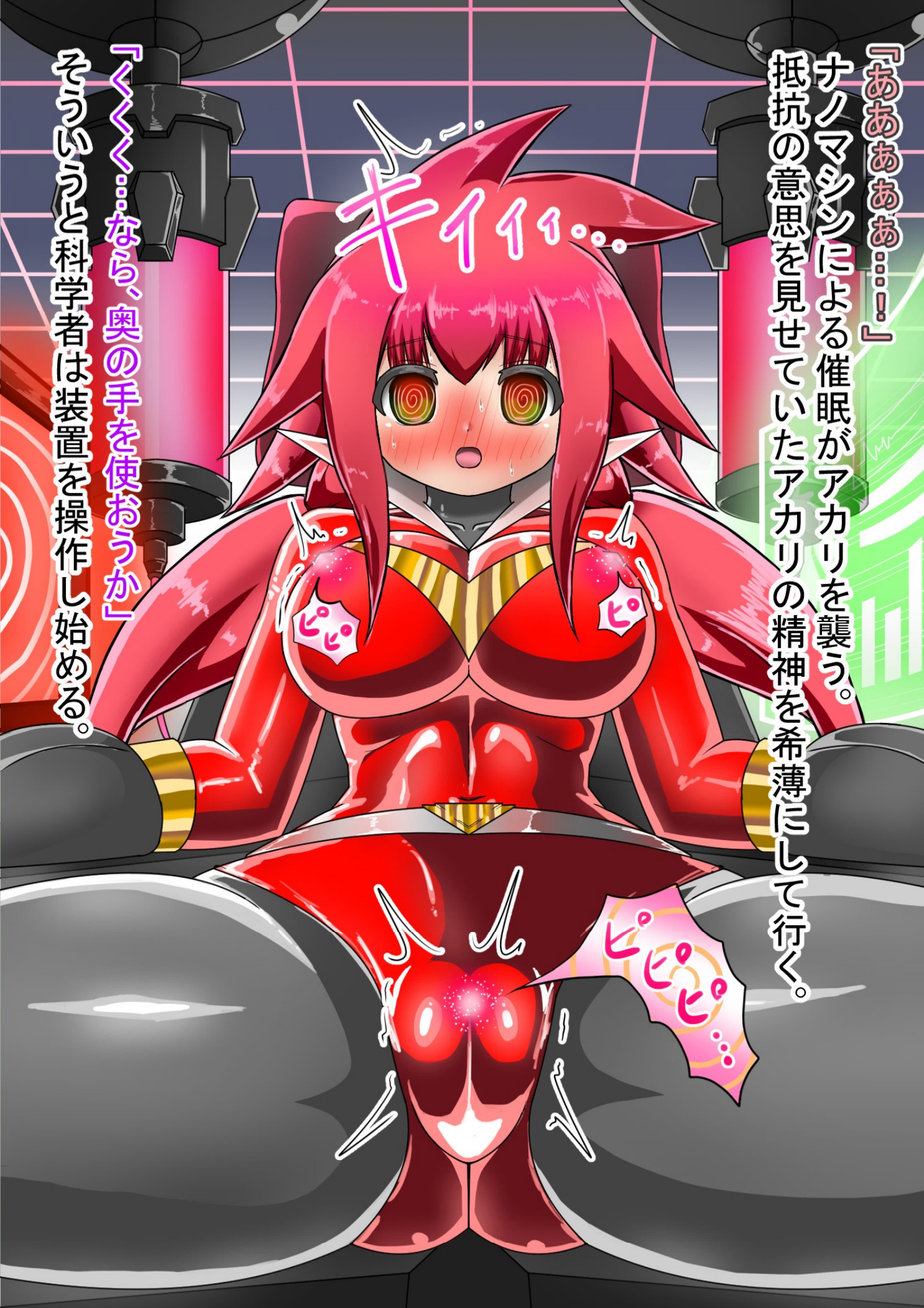
ラスティレッドに変身したアカリは
胸元に弱体装置を取り付ける。
キュイィィィ…
弱体装置が唸りはじめる。
『んぅっ…』
アカリを脱力感が襲いはじめるが
それに反して身体の疼きは増しはじめる。
キイィィィ…
アカリは導かれるかのように鏡の前に立つ。

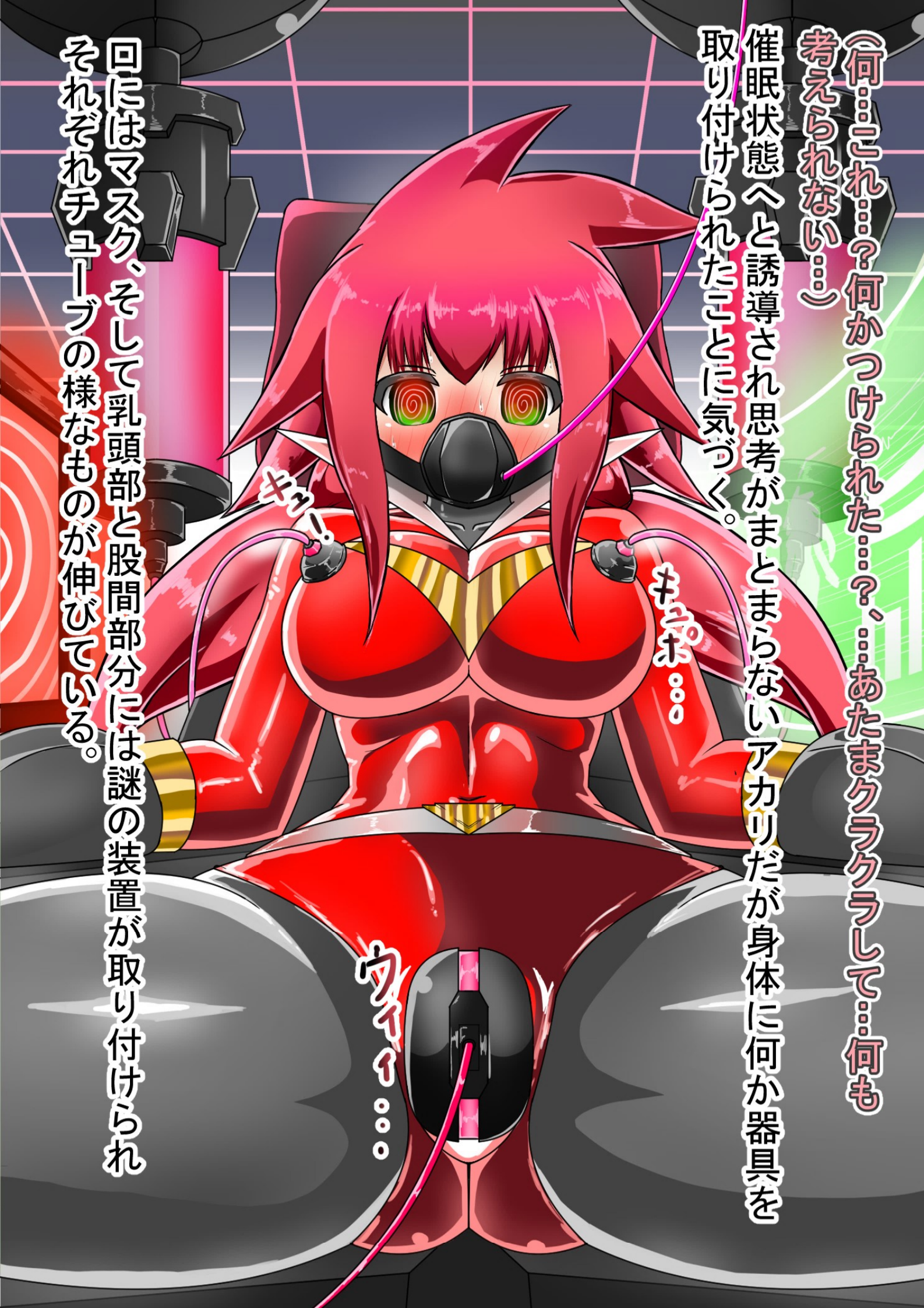

【第9章 洗脳装置】

（あたまがぼんやりする…）
意識を朦朧とさせながらも何とか自身の状況を理解しようとする。
ウィイイン…
（何…ここ…？、身体が動かない…）
周りには様々な機械が備え付けられており、
アカリは椅子に座り手足は拘束具でしっかり
固定されている。
ブゥゥゥン…
ガシャ…

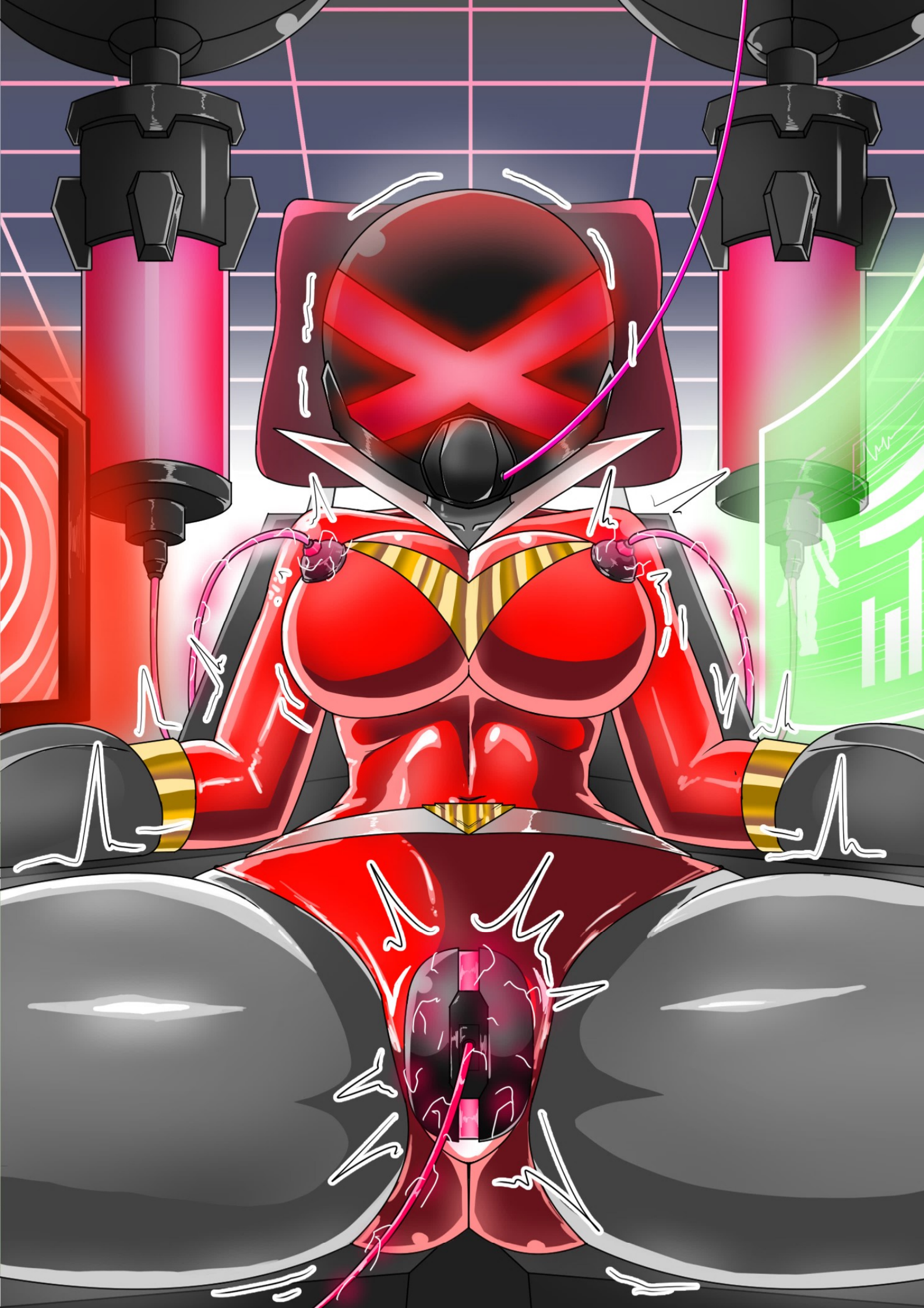
「くくく、目を覚ましたようだな」
スピーカーを通しバッドクロスの科学者がアカリに声をかける。
「っ!?、この声はこの前の…」
聞き覚えのある声にアカリは意識をはっきりさせる。
「そうだ!ぼくは負けて…」
ビク!
ピピピ…
「くうっ…!、はっ、はっ」
「くくく、どうした?犯された時の事を思い出し興奮してるのか?」
意識を失う前に凌辱されていた事を思い出し、それにナノマシンが反応し
アカリを発情へと導く。
「そ、そんなんじゃないっ!ぼくは…」
ピ
ピピ
ピピピ…


自身の身体に戸惑うアカリに科学者はある提案をする。
「さて、本題に入ろう。ラスティレッドよ、我々バッドクロスの下部となれ！」
『なっ、ぼくが!?ふざけるなっ!!』
科学者の提案に驚き当然反発するが…
「我々のものとなればその身体の疼きを満たしてやるぞ」
（疼きを満たす…）
科学者の言葉に一瞬期待感を高めてしまうアカリ。
ピピピ…
（くっ、こんな時なのにまた身体が熱くなって…）
『ぼ、ぼくはラスティレッドだ！バッドクロスになんか従わない！』
高まる性欲に戸惑いながらも科学者に抵抗の意思を見せるアカリ。
「そうか…、だが貴様に拒否権は無い」
ピピ、ピピピ…
はぁ
はぁ
ピクン！


『あああああ…！』
ナノマシンによる催眠がアカリを襲う。
抵抗の意思を見せていたアカリの精神を希薄にして行く。
キイイィ…
ピピ
ピ
ピピピ…
『くくく…なら、奥の手を使おうか』
そういうと科学者は装置を操作し始める。

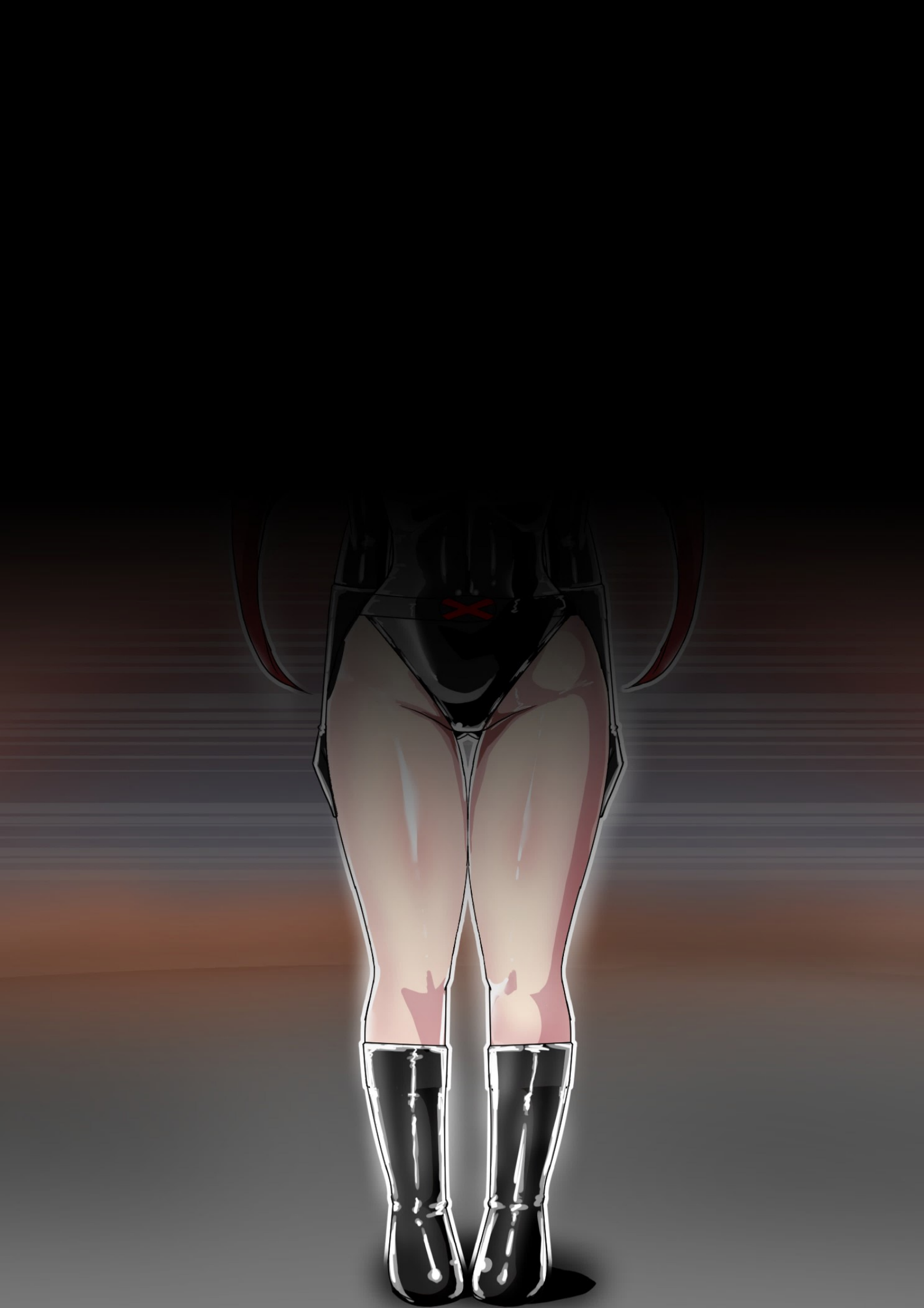

（何…これ…？何かつけられた…？、…あたまクラクラして…何も考えられない…）
催眠状態へと誘導され思考がまとまらないアカリだが身体に何か器具を取り付けられたことに気づく。
キュポ…
キュ！
ウィィ…
口にはマスク、そして乳頭部と股間部分には謎の装置が取り付けられそれぞれチューブの様なものが伸びている。

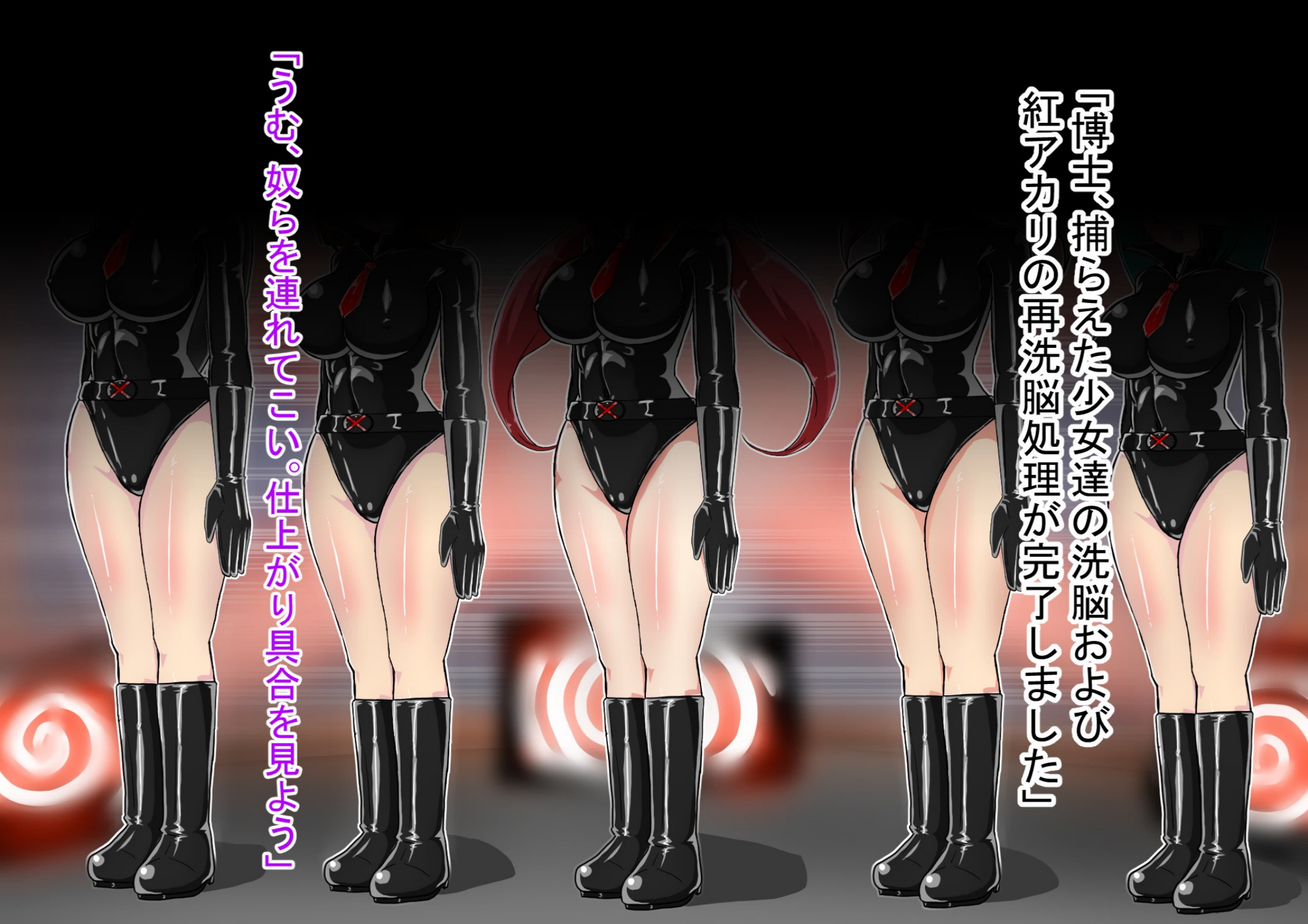
「乳頭部および股間部パルスバイブレーター起動。」
「ううっ…！あっ！、あっ、あぁ…♥」
科学者がスイッチを押すと装置から微弱な電流が流れアカリの性感帯を刺激する。
「洗脳促進催淫ガス注入開始」
（なにこれ…、甘い香り…息を吸うたび頭がしびれる…♥）
ビクッ！
シュイイイン…
プシュー…
ジジジ！
次はマスクからガスを注入される。
さらに科学者は装置を操作する。
「よし、洗脳メット展開」
キュイイイ！
ビクン！
ジジジ



「くくく、指導中にイクとはなんて情けない」
「はぁ、はぁ、…申し訳ありません、ご主人様」
「貴様にはもっと厳しい躾けが必要なようだ」
「はい、ご主人様…」

「さらなる教育の前に貴様にはふさわしい服に着替えてもらう。
さぁ、この場で着替えるんだ！」
『はい…』
「ぐずぐずするな！」
『は、はいっ！、申し訳ありません！、すぐに着替えます…』




「博士、捕らえた少女達の洗脳および
紅アカリの再洗脳処理が完了しました」
「うむ、奴らを連れてこい。仕上がり具合を見よう」

キ
イ
イ
イ・・・
『お前たち、挨拶をするんだ！』
『『『『はいっ！』』』』